

時代に足跡を記した大先輩・その6

実業家、アンデス文明研究家

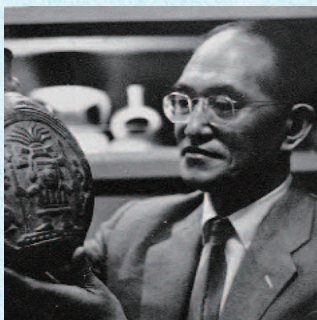
天野 芳太郎 (あまの よしたろう・1898～1982)

大正5年機械科卒

1898年7月2日、秋田県南秋田郡脇本村(現・男鹿市脇本)に生まれた。父は土木建築請負業を営んでいた。

<実業家への道>

1913年(大正2年)秋田県立工業学校(現・秋田工業高校)機械科に進学。同校を卒業後、神奈川で鋳物工場を設立し、1921年には天野商会を発足。横浜馬車道の支店で「子育て饅頭」を売り成功した。このころすでに日本を飛び出し広い世界で活躍したいと中南米に憧れていた。



1928年4月27日、大阪商船の博多丸で横浜から香港、シンガポール、ケープタウンを経て南米ウルグアイを目指した。7月10日、モンテビデオに上陸を果たすが、父・吉治の訃報が届き、直ちに帰国の途に着いた。一時帰国した天野はその年の12月31日、再び横浜港から今度は太平洋を横断し、ハワイ、ロサンゼルス、メキシコを経てパナマに至り天野商会を立ち上げる。パナマを拠点に中南米各地で事業を興すことを計画し、チリに農場、コスタリカに漁業会社、エクアドルに製菓会社などを設立した。中南米の古代文化に関心をもち、パナマに居を構えながらペルーやコロンビアの古代アンデス文明の遺跡を訪ね、出土した遺物や副葬品に目を凝らした。1941年12月7日(アメリカ時間)、日米開戦の報が届くと同時に、写真の趣味もありスパイと疑われアメリカで6ヶ月間の収容所生活を余儀なくされたが、交換船で帰国。

<再びペルーの地へ>

1951年2月14日、天野はスウェーデンの貨物船クリスター・サーレン号で横浜を出港するが、猛吹雪で遭難。まっぴらつに割れた船体で13時間も漂流した後、米国船に救助され奇跡的に生還した。2ヶ月後には再起を期してカナダ経由でペルーに戻り、在留邦人に熱烈歓迎を受ける。旧友たちは天野が提案した魚粉や魚網の会社設立に手を差し伸べた。天野は再び大きな成功をおさめることとなる。

<チャンカイ文化と天野>

この時期の天野は事業の拡大や戦争で凍結されたままの資金の奪回、そしてリマの北方60キロにあるチャンカイ河谷の遺跡での考古学調査と、多忙を極めた。

チャンカイ河谷を不毛の砂漠から緑の耕地に変えたのは、日系移民の血のにじむような努力の結果でこの地は、第1回移民(1899年)の岡田幾松による綿花栽培の成功を機に、養鶏や野菜栽培、柑橘類の一大生産地となった。天野の考古学調査を影で支えたのは、こうしたチャンカイの日系人だった。もともとプレインカ遺跡のなかでも、チャンカイ文化はあまり注目されてはいない文化だったが、砂漠から出土する土器や織物が、きわめてレベルの高いものであることに天野は気づいた。「旧大陸の文化は王侯貴族のものであった。しかるにこちらの文化は庶民の文化のレベルが高い」と、我がこのように自慢したのである。

<泉靖一との出会い>

1956年2月、東京大学教養学部助教授だった泉靖一が、ブラジルでの日系移民の調査の帰途リマに立ち寄り、天野邸を訪ねた。

泉は天野からチャンカイを始めとする古代文化の面白さを聴かされ、パチャカマなどいくつかの遺跡を案内された。

この出会いがきっかけとなって泉はペルーの古代文明と取り組むことを決意し、東京大学にアンデス考古学の講座が設けられることとなる。1958年1月には私設の天野博物館が発足し、5月には東京新宿の伊勢丹デパートで初の「インカ文明展」が開催された。

第1回東京大学アンデス地帯学術調査団(石田英一郎団長)がペルー全域にわたる調査に出発したのも、この年の6月だった。3ヶ月にわたる調査の一部には天野も同行した。

このときから40年、東京大学は17回にわたって調査団を派遣し、それまで不明だったアンデス文明の起源に迫る発見・発掘を今日まで続け、世界の考古学の発展に貢献している。

天野博物館がリマ市ミラフローレス区レティロ街160番地に竣工したのは1964年5月。開館は天野芳太郎66歳の8月だった。

1967年5月14日、皇太子(現天皇)ご夫妻が来訪。パチャカマ遺跡や館内をご案内した。「皇太子ご夫妻のご臨幸は14日午後5時10分から6時までの50分でありました。光栄でありました。私はこの50分の為に生きてきたと思っております」(初代ペルー味の素社長小池道夫氏への手紙)と、皇室を畏敬する明治人の心情を素直に述べている。

博物館の来館者は千客万来で、研究者や作家、政治家、ビジネスマンと枚挙にいとまがない。1階のホールではアンデス学の公開講座も開かれた。こうした交流の場は、天野にとっては貴重な情報源ともなったし、勉強の場でもあった。

1969年、71歳になった天野は、チャンカイで織物の「サンプル織」を発見した。「当時のおかみさんたちは、これを見て好みの織物を注文したに違いない。それほど豊かな文化がここにはあったのだ」と我が意を得たりと会う人ごとに披露するのだった。

<晩年の天野芳太郎>

この年の10月、天野は脳血栓で倒れた。

幸い発病後2、3日で意識が戻り、10日目には歩けるまでに回復した。天野は奇跡的な回復を成し遂げたが、天野にとって盟友にもっとしい泉が1970年55歳の若さで急逝する。天野の落胆は大きかった。しかし、「泉教授亡きあとアンデス学を見守り、後進へ少しでも道を拓いておくことができるのは自分しかいない」という使命感を燃やし、教育者のような力を発揮してアンデス文明に関心を持つ同学の土を増やし続けていった。

晩年に至るも博物館を訪れる人は絶えない。

1959年ペルー国政府から文化功労章、1980年には吉川英治賞、そして1982年10月1日、日本と中南米との文化交流に尽くした功績により国際交流基金賞を受賞。その年の10月14日、天野芳太郎は84歳で波瀾万丈の生涯を閉じた。

1964年の開館から50年後天野博物館は改装され「天野プレコロンビアン織物博物館」と改名された。

※ 参考サイト：【偉人録】郷土の偉人、天野プレコロンビアン織物博物館、ペルー協会天野博物館友の会、ウィキペディア

◆ 記事

赤川 均 (昭和41年電気科卒)



対応業務

プロダクト関連・・・商品企画・工業デザイン・開発設計・筐体設計
販売促進関連・・・販促企画・販促物デザイン・制作(DTP)

書籍・刊行物関連・・・企画・編集デザイン・制作(DTP)
内装・ディスプレイ関連・・・空間企画・デザイン設計

マーク/サイン・・・ロゴマーク・C I・ピクトグラム等
その他・・・各種表現物の企画・デザイン・制作

プランニングディレクター&デザイナー 船木 一美
(昭和48年機械科卒)

P&D_KFworks
プランニング&デザイン_ケーエフ_ワークス

埼玉県新座市野寺5-6-20 〒352-0034
携帯.090-3049-7291
E-mail kf-works@sea.plala.or.jp